

## 古代日本語の船舶の名称における外来語の要素について

黄 當 時

### 〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称には、日本語一視点では正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明した。「籠」は、茂在氏の言うカタマランの音訳である。浙江省の漁民が使う言葉に「無眼龍頭」があり、「無目籠」は船眼の装飾がない船のことである。

「大目龜籠」は、記録の過程では、「无目龜籠」と表記されたはずである。壁画と語部は、ともに、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報を伝えているが、『記紀』には、「天鳥船」、「天鴿船」、「天磐船」、「无目龜籠」の例がある。一云には、「以細繩繫著火火出見尊而沈之」とあるが、この「沈」は、乾式の「沈」であり、湿式の「沈」ではない。

キーワード 枯野 / 手乃、諸手船、无間勝間之小船、無目籠、大目龜籠

### はじめに

古代日本語の船舶の名称には、日本語一視点では正確に理解できないものがある。

この問題に興味を持つ者は誰であれ、いわゆる海の民の視点を持つことができさえすれば、解明の扉を開けられる、という見当はつく。海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。

私たちは、海の経験が乏しくはあるが、このような知識を持つことができるならば、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができることであろう。道具立てを間違えなければ、解析対象を見極める能力を高め、解析に必要な知識を入手することは可能であろう。

小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、さらに、必要最小限の知識を入手しつつ、

幾つかの船舶の名称について解析を進めていきたい。

## 1. 先達の知見

古代日本語の船舶の名称における外来語の要素については、従来の研究には見るべきものがほとんどないが、二人の先達が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので見ておきたい。

茂在寅男氏は、航海学が専門で、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後、カリブ海の原住民から伝えられたものであり、そのアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う<sup>101)</sup>。そして、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが<sup>102)</sup>、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった。その説は、重要な提言ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している<sup>103)</sup>。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌー・・・をその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」

の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」

の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明に向けた極めて重要な手掛かりとなる。

## 2. 『万葉集』の例

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので<sup>201)</sup>、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えてみたい。

・・・『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三三六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、（四三三六）の「伊豆手夫禰」<sup>202)</sup>と（四四六〇）の「伊豆手乃舟」<sup>203)</sup>である。

外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法がある。

中国語では、どちらも漢字で表記することになるが、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが

多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「カ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、[ジョッキに入れた]生ビール；信用卡、クレジットカード）。ところが、「啤」や「カ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

現在の中国語に見られるこのような手法を、古代の日本語は、既に採用している。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫祢」や「舟」という類名を加えて、「手夫祢」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、どちらも、「手乃」と呼ばれる船である。表記の違いは、(四四六〇)では、「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約を受けて、やむなく一文字省略せざるをえなかった、ということから生じている。そして、歌人は、一文字省略するに当たって、前の「手」を略して後の「乃」を残したのではなく、後の「乃」を略して前の「手」を残したのである。

もちろん、逆に、(四三三六)で「手」と詠まれた船を、(四四六〇)では二音節で詠むために、「手」に「乃」を後置して「手乃」とした、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、意味は取れなくとも、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない構造であることは見て取れる。なお、「手」は、意味も知らずに訓み一つ当てただけであって、歌人は、元々、「手」と詠んでいたはずである。この訓み誤りは、「手」や「手乃」の語義がわからなくなってしまったことに起因している。

次は、(三一七二)の「熊野舟」<sup>204)</sup>、(〇九四四)の「真熊野之船」<sup>205)</sup>、(一〇三三)の「真熊野之小船」<sup>206)</sup>である。

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、同じタイプのもを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の関係で「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の「安之我良乎夫祢」<sup>207)</sup>である。

外来語を音訳で取り入れる際に、音節数が少なくわかりにくいと、「外来語+類名」という処理がなされやすいことは、上述した通りであるが、これらの単語も同じ手法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

「小/乎」を「を」と訓むのは、後人の訓み誤りで、歌人は、「こ」と詠んでいたはずである。後人は、万葉人がたまたま使った「小/乎」がたまたま「を」と読めるために、接頭語か形容詞と誤解したが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と訓むべきものである。この訓み誤りは、船に関するかなりの知識が失われてしまったことに原因がある<sup>208)</sup>。

漢字がわかる者は、字形の示唆する意味からなかなか自由になれない。この問題もそうだが、漢字が表音のために用いられていることを見抜かねばならないケースでも、字形で解け（た気分になれ）れば、思考がそこで停止してしまう。

歌人は、表音のために「小」や「乎」を用いたのであり、その字形が示す意味は特に考慮されていない、と考えてよい。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟の大きさを連想することはない。ところが、「小船」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまったても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する音訳の外来語ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。

「手」は、「tau」であり、「手乃」は、「tau-nui」である。そして、「小/乎」は、「kau」である。上に引用した井上氏の説明を思い出して頂きたい。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃 (tau-nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、(四三三六)の「手 (tau)」が(四四六〇)の「手乃 (tau-nui)」と同じ大型船を指すように、大きいことを明言する場合を除き、「手 (tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーが大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎 (kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手 (tau)」が使われ、熊野や足柄では「小/乎 (kau)」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手 (tau)」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎 (kau)」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、枯野/軽野; kau-nui、狩野<sup>209</sup>); tau-nui、手乃) と、「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手; kau、小/乎) があったことがわかる。

### 3. 諸手船

『日本書紀』(神代下、第九段、正文)に、「熊野諸手船」という船がある。

『日本国語大辞典』は、諸手船を、「(「もろた」は諸手または両手の意) ①多くの櫓のついた早船または、二挺櫓の早船。②島根県八束郡にある美保神社の諸手船神事に用いるくり舟」と説明し、また、諸手船神事の項で、「船員船子らが樟(くすのき)をえぐったくり舟に乗り、海岸で神官が擬装した事代主神に拍手をし帆をかけて六回港内をこぎ競う」と説明している(第十九巻、p. 389)。

茂在氏は、「諸手」の字を「モロタ」と読ませているが「モ・ロト」の当て字ではないか、と考えた。ポリネシア語では、「ロト」は「内海」であり、「モ」は「・・・に使うためのもの。何々用の」であるから、「モ・ロト」は「中海用の」という意味になる、というわけである。個々の単語の意味は、そうではあるが（mō for; for the use of と roto lake; swamp）<sup>301)</sup>、茂在氏は、偶然目にした「ロト」という単語に拘泥するあまり、直感的にも、「モロ・タ」で読みを切り分けるところを「モ・ロト」と切り分け、付随して、「タ」を「ト」と読みかえる無理を重ねてしまったのである<sup>302)</sup>。

茂在氏は、諸手船に関する最も信頼できる情報として、その著書に美保神社社務所発行紙『美保』（昭和54年9月20日版）の「素朴ななかに精緻な技法・刳舟のおもかげ<sup>おもかげ</sup>諸手船」を引用しているので、ここに再録し、目を通しておきたい<sup>303)</sup>。

船体は、大きな<sup>もみ</sup>縦材の中を刳った二本のオモキ（主材）を、胴部がふくらんだ凹円形になるように漆で接合し、船釘で止めてある。さらに船首にツライタ、船尾にトコイタを張り、両舷側を二本の太い船梁で支え、がんじょうな構造をなしている。

諸手船は、本来<sup>くす</sup>樟材の単材式刳船であったと伝えているが、用材が不足し、二本のオモキを接合する方法、オモキとオモキの間に補助材（チョウ）を入れる造船法となり、用材も樟から縦に変わってきた。・・・。

現在の諸手船が古型の刳船のおもかげをよく保持し、耐波性・高速性および乾湿に耐えることに工夫されていると認められるのは、たとえ古風に見えても、優れた技法によるものと注目しなければならない。・・・。

諸手船の名称については諸説あって、目下のところ、「諸人の手によって漕がれる船」の意で、原始的な刳舟から、あるていど進んだ構造船とする見方が有力である。文献上の諸手船の最古の例は、日本書紀の国譲りの条に見える、熊野諸手船である。

オモキとは、「主木」のことで、「丸木船」の一種である。一本の丸木でこれだけの用材を求めるのは困難であるため、二本の丸木を準備し、一本で船を縦割りにした半分だけを刳り抜いて作り、もう一本で対称の形のオモキを作り、この二本のオモキを接合して、船底を含む船体の大部分を形作り、これに、船首にはツラ板、船尾にはトモ板を付け、さらに船バリ、船ブチの取付けをして形を作り上げる。船の寸法は、約6メートルが標準である<sup>304)</sup>。

茂在氏は、「諸手船」を、「中海用の船」である、と結論づけたが、その言語的考察が間違っていることは、指摘し、正しておかねばならない。

「諸」とは、「しっかりと結びつける」の意味である（molo. vt. to tie securely）<sup>305)</sup>。「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、既に検討した通り、手（tau）という名の船である。そして、「船」は、「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助け

るための類名である。全体で、オモキを嚴重に連結してできた手 (tau) という船、の意であることは、おわかりであろう。

#### 4. 无間勝間之小船

##### 4-1. 姉妹船

海幸彦・山幸彦の話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。

この船には、幾つかの名称がある。『古事記』(上巻)では、「无間勝間之小船」<sup>401)</sup>、「无間勝間之小船」<sup>402)</sup>であるが、『日本書紀』では、「無目籠」(神代下、第十段、正文)<sup>403)</sup>、「無目堅間」(神代下、第十段、一書第一)<sup>404)</sup>である。そして、これら(以下、姉妹船)以外に、さらに一つ、「大目籠」(『日本書紀』神代下、第十段、一書第一)<sup>405)</sup>という名称も持っている。

考察の便宜上、姉妹船をひとまず「無目籠<sup>かたま</sup>之小船」の一語に括っておく。

人々は、「無目籠<sup>かたま</sup>之小船」の解釈に長く苦しんできた。この言葉は、一般に、次のように説明されている。

竹で固く編んだ、すきまのない小舟<sup>406)</sup>。

隙間のない竹の籠<sup>かご</sup><sup>407)</sup>。

隙間なく竹を編んだ小さな籠<sup>かご</sup>の船<sup>408)</sup>。

密に編んだ隙間のない籠<sup>かご</sup><sup>409)</sup>。

籠は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。大事な任務を持って遠くへ出かける時にわざわざ造って乗るようなものではない。

茂在氏は、次のように述べる<sup>410)</sup>。

・・・無目堅間小舟・・・は御存知であろう。・・・在来は目つぶしをした籠の舟と訳しているこの船。無目は水密など訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せよといったら、「カタマ小舟」と訳するのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。・・・もともとカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏が、「籠<sup>かたま</sup>」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功績は大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗物としては不適當である。『記紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目がない」という意味なのである。

中国語では、龍の裝飾があるものを、龍と言うことがある<sup>411)</sup>。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の裝飾が施され、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい。例えば、唐の薛逢の詩「觀競渡」に、「鼓聲三下紅旗開，兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟のことである<sup>412)</sup>。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられている。

このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章の一つ見ておきたい<sup>413)</sup>。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言ひ、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の裝飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。この地区の漁民は、漢化しても、なお、船を龍と見なす祖先の文化を継承してきたのである。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。これが、「無目籠」が船眼の裝飾のない船であることを教えてくれている。

『記紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の裝飾がない船を「無目龍」と呼ぶ人々がいたのではないか。少なくとも、その頃の日本人がそのような文化が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目籠」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目籠」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目籠）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』には、さらに、竹を取って大目籠を作った、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を同時に伝える好個の文字と考えられたのではないか。



「無目籠かたま之小船」は、意味のよくわからない「無目籠かたま」に、よく知られている「小船こぶね」を後置して意味説明を補足する形式を取っている。

茂在氏は、上に引用した通り、カタマランは「カタマ小舟」と訳せる、と言う。全体像の捕捉という点で問題はないが、正確ではない。この着想で訳すなら、カタマランは、「カタマ船（勝間船/堅間船/籠船）」となるからである。

先に、外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法があり、音訳では、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。そして、beerやcardは「啤酒」や「卡片」である、と例示した。泡があるとか、小さいとかいう要素を類名に持たせることはないので、いくら泡があつたり、小さかつたりしても、「啤酒」や「卡片」が、「啤酒酒」や「卡小片」となることはない。「之」を介していることからわかるように、「無目籠かたま之小船」の「小船」は、類名ではないのである。

シホツチの老翁は、第三者がその小ささに言及せねばならないほど、明らかに形状が小さい船をわざわざ作って山幸彦に提供したわけではない。この「小船こぶね」が、決して、小さい船という単純な意味で使われているのではないことは、もうおわかりであろう。「小船こぶね」は、ここでは、「コ (kau) と呼ばれる船」のことであり、既に検討した通りである。

さて、「無目籠かたま之小船」は、考察の便宜のために創作した仮の言葉である。おおよその意味が取れたところで、この一語に括る前の、個々の表記の出入りも検討しておきたい。

『古事記』には「之小船」が付され、『日本書紀』にはそれがない。語部の言うカタマは補足説明なしにはもはや理解できないという認識は、『記紀』の編纂者に、程度差はあるものの、共通して見られる。『古事記』は、「無間勝間/無間勝間」の直後に「之小船」を付すことで、『日本書紀』は、文末の「一云」で「是今之竹籠かたま」と述べることで<sup>414)</sup>、意味説明を補っている。両者は、表現の手法や用いた漢字こそ異なるが、伝えようとする情報には違いがない。どちらも、今の言葉で言うコ (kau) に相当する船であることを伝えている。

外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。『記紀』における「勝間」と「堅間」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（あるいはできなかった）ために生じている。『記紀』がそうしなかった（あるいはできなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。先に、「小船こぶね」が何であるのかを見たが、「小」と「乎」の揺れ、さらには、「籠かたま」の揺れも、同じ理由によるものである。

「無目」には、「無間/無間」と「無目」のバリエーションがあるが、いずれも、動賓 (VO) 構造である。この構造は、この表現が、音声を表記したものではなく、意味を表記していることを示している。言い換えれば、「マナシ/まなし」という音声ではなく、「まなし/まなし」<sup>415)</sup> という意味を表記しているのである。

残るは、「間」と「目」の出入りであるが、表記に違いはあるものの、伝達しようとする情報には違いがない。「間」と「目」は、ともに「目/眼」のことである。

同一情報の記録に同一表記を用いる手法ほど単純明快なものはない。『古事記』の編纂者は、語部の言う「マ」という音声のどちらをも「間」で書き記したが、後人は、同一表記（間）が同一情報（マ）を伝えていることを見て取ることもできなかった。

答は、既に出ているので、お気付きかも知れない。先に、船には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾を施さないものがある、と例示した。『古事記』は、「マタノタタラ」という音声情報（外来語）を「間」と書き記し、『日本書紀』は、「船の眼」という意味情報を「目」と書き記したのである<sup>416)</sup>。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠之小船」の意味は、次のようになるだろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で、ある文化圏では無目籠と呼ばれ、船材に竹を用いているが、今の日本語では、外来語のコ（kau）と組み合わせて、通常、コぶねと呼んでいるものに相当する船」である<sup>417)</sup>。

こうして、「無目籠之小船」というやや長めの単語の意味がようやくわかったが、よくぞ、これだけの情報を織り込んだものである。語部が正確な情報を提供し、『記紀』の編纂者が淵博な知識でそれを記録・編集したからであるが、後世の人々には、同じ程度の広い知識がないために、書かれたことを理解することすら難しい。このような単語を相手に、日本語一視点のみで立ち向かうものではない。

「無目籠之小船」が示す全体像には圧倒される。四方のことを、東西南北とも言うが、この一語には、東のポリネシア文化に加えて、南方のタミール語圏の文化<sup>418)</sup>と西の中国江南の文化までもが織り込まれている。古代の日本人が途方もなく広い地域の人々と交流があったことには、改めて驚かざるをえない。

#### 4-2. 大目籠籠

「大目籠籠」は、一般に、次のように説明されている。

目のあらい籠<sup>419)</sup>。

編目の粗い竹籠。これは「無目籠」（一五七筈）の目のつまった籠とは反対に、目が粗いからすぐ沈んでしまう<sup>420)</sup>。

同じできごとの報告でありながら、姉妹船は沈まず、「大目籠籠」はたやすく沈む。両極端とも言えるほどの矛盾をどう理解すべきかについて、合理的な解説や説明がなされていないが、それは手の出しようがないからではないのだろうか。海の経験の乏しい私たちに、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識が不足してはいないのだろうか。

「大目亀籠」は、一見、手の付けようがないように見えるが、仮に、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点にもう少しでも近づけることができるならば、何とか理解できそうにも見える。この説話を残した人々の視点とは、いわゆる海の民の視点であるが、具体的には、彼らの言語や文化についての知識ということになる。

姉妹船が何であるのかが正確にわかった現在、解明の扉は開かれたのではないだろうか。有用な知見や知識をもう少し入手できれば、解明できるのではないだろうか。

#### 4-2-1. 表記の誤り

「大目亀籠」は、表記に誤りがある。それは、編集の過程で生じたものであるが、編纂者であれ研究者であれ、海の文化に対する理解不足のために誤りがあることに気付くことすらできなかった。

「大目」が「无目」を書き誤ったものであることは、特別な知識がなくとも、容易に見て取れる。それを訂正すると、「亀」が浮いてしまうが、それは、「无目」を「大目」と誤認したことに付随して生じた誤記であり、やはり正されねばならない。では、『日本書紀』は、編集の過程で、どのような漢字を「亀」と書き誤ったのであろうか。漢字や古典を知る者なら、「龜」と見当をつけるのに、それほど時間はかかるまい。

語部が提供した音声情報は、記録の過程では、「无目亀籠」という文字情報に変換されたはずである。その後、編集の過程で、書かれたことの意味が取れず、「沈」(後述)とつじつまを合わせるため、「无目」を「大目」に、「龜」を「亀」に書き換えたわけである。

「无目亀籠」とその姉妹船が登場する説話は同じものであり、「无目亀籠」と姉妹船は同じ船である、と理解してよい。つまり、この「无目亀籠」と姉妹船の「<sup>カクア</sup>無目籠<sup>コ</sup>之小船」とで、表記の上では龜(以下、特に必要な場合を除き、亀)の有無という違いはあるものの、実際には姉妹船も亀を舶載していた、と理解してよい。記録・編集の過程で漏れがないとすれば、「無目籠」という情報を伝えた語部集団は、口承の過程で、亀という情報を落としたことになる。どの語部集団も伝えない、亀の舶載という情報を保持した語部集団は、極めて優秀であった。

もしも、亀がなければ、「无目」が「大目」と誤記されることはなかったであろうが、そうすると、私たちは、姉妹船と同じ「无目籠」という情報しか得ることができない。亀は、そこから情報が取れない者には余計な存在であろうが、この一文字がもたらす情報は、計り知れないほど重要である。

亀は、亀でしかないが、海の民は、いわゆる亀を外洋船に乗せない。では、彼らは、どのような動物とともに航海したのだろうか。古代人の航海(法)について、ある程度の知識があれば、解答は決して難しくなかる。

ここで、この問題を解くのに必要な知識について、少し確認しておきたい。

<sup>からこ</sup>唐古・<sup>かぎ</sup>鍵遺跡(奈良県磯城郡田原本町)の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。

東ひがし殿塚古墳（奈良県天理市）の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、舳先に鳥が描かれている。珍敷塚古墳（福岡県浮羽郡吉井町）の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

#### 4-2-2. 鳥の船載

人間がやりとりする情報は、通常、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（聴覚情報、以下、音声情報）の二種である<sup>421)</sup>。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあつては、視覚情報を用いるしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（図像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

ところで、音声情報は、本来、その場限りのものであるが、古代の日本人は、語部という時空を越えて音声情報を伝達する手法を編み出している。このシステムでは、音声情報の受け手は、一次受け手を除き、それを大元の送り手から直接受け取るのではなく、その代理人ともいうべき者から時空を越えて間接的に受け取るのである。

非文字情報は、精度が低く情報量も少ないが、語部という音声情報を伝達するシステムは、非文字情報の短所を強力に補うことができた。しかし、語部がいかに優秀であっても、口承には、情報を完璧にはコピーできない欠点がある。コピーを繰り返すほど、情報が劣化する。そのため、一度、文字情報が利用できるようになると、語部は必要とされなくなり、このシステムは急速に廃れてしまった。

古代の日本において、一部の情報が非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されていることは、知っておかねばならない。言い換えれば、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記紀』等の文字情報に変換された音声情報に共通する部分があることには、注意を払わねばならない。日本の古典を知る者には容易に見当がつくであろうが、土器や壁画の図像と語部の口承に共通する情報とは、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。

ここで、日本の古文献には、どのような例があるのかを見ておきたい。

「天ト鳥船」<sup>422)</sup>、「天ト鵠船」<sup>423)</sup>では、漢字の表意機能が利用されているため、字面の通り、「鳥」、はと「鵠」<sup>424)</sup>と取ってよく、わかりやすい例である。

なお、「天鳥船/天鵠船」の「天」は、表面上、意味表記に見えるが、実は、例えば、天井・天汁テンの天や丸芳露マル<sup>425)</sup>の丸と同じく、外来語の音声を表記したものであり、天アマ（空）の意味はない。「天」とは、「アウトリガー・フロート」(ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float<sup>426)</sup>) のことである<sup>427)</sup>。

「天ト磐船」<sup>428)</sup>では、鳥という情報を伝える漢字は、字形ではなく字音に意味を持たせているため、理解するには、先の「天」・「丸」や「天」同様、言語の知識がある程度必要である。磐

の船が水に浮かぶことはないことから、意味表記ではないことがわかるが、「磬<sup>いづ</sup>」とは、「軍艦鳥」(iwa. n. Frigate or man-of-war-bird<sup>429</sup>) のことである<sup>430</sup>。

「磬」は、適切な言語の知識がなければ、「磬」と誤解するのは必至であるが、『記紀』の一部の単語には、それを防ぐ工夫がされている。「鳥<sup>い</sup>之<sup>わ</sup>石<sup>い</sup>楠<sup>わ</sup>船<sup>い</sup>」、「鳥<sup>い</sup>磬<sup>わ</sup>櫂<sup>い</sup>船<sup>わ</sup>」<sup>431</sup> という表記は、冗長と承知の上で、「石/磬」を石や岩の「石/磬」ではなく鳥の「石/磬」に紛れなく理解してもらうために、本来必要のない「鳥<sup>い</sup>之<sup>わ</sup>/鳥<sup>い</sup>」という語義説明を敢えて補ったものであるが、後人は、書かれたことの意味を取ることすらできなかった。

最後は、「无目龜籠」である。前述の通り、海の民は、いわゆる亀を外洋船に乗せない。そして、非文字情報と、後に文字情報に変換された音声情報に共通する情報は、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。船名を構成する動物は、鳥なのである。そうすると、この亀は鳥と解析するしかないが、古代人からそう呼ばれた鳥が実際に存在するのであろうか。

「石/磬<sup>いづ</sup>」が受けた誤解は大きい、「亀」が受けた誤解は、さらに大きい。亀は、一般に、爬虫類の亀を意味するが、さらに、鳥類の亀の意味がある。鳥類の亀は、全称を亀鶴といい、略称を亀という。古代日本語以外の言語では、例えば、古代英語でも、亀鶴は、通常、亀と略称されていた<sup>432</sup>。

“Turtle” was a common archaic English shortening of the name “Turtledove.”

ハワイ語に、kuhukukūという単語があり、鶴もしくは亀鶴を意味する (kuhukukū. n. Dove, turtledove<sup>433</sup>)。kuhukukūが、turtle (亀) と訳された例を挙げておく<sup>434</sup>。

*The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.*

では、海の民は、何のために、鳥を船に乗せて航海したのであろうか。

外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入っていない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥(特に、ハトやカラスなどの陸鳥)を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

今日の船舶には、航海用レーダーの搭載が欠かせないが、古代の海の民にとって、鳥はいわばレーダーであった。彼らにとって、外洋船に鳥を積み込むことは、特に目的地が大海の中の小さな島のような場合、乗員が生きて再び地面を踏むことができるかどうかに関わる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、鳥の舶載を非文字情報と音声情報(後の文字情報)の二種の媒体が伝えていることから窺い知れるが、例えば、「天鳥船」を構成する三要素の中の一要素を「鳥」が占めることから理解できよう。

#### 4-2-3. 動詞の意味

一般に、ある一つの単語が、二言語（文化）間で意味・用法に広狭の違いがある場合、「広」の側から見て、「狭」の側の意味・用法は比較的容易に理解できるが、逆に、「狭」の側から見ると、「広」の側の意味・用法には急には理解できないものが間々あるものである。

『日本書紀』の「一云」に、「以細繩繫著火火出見尊而沈之」とある。

「沈む/沈める」（以下、「沈」）は、「人や物が水面上から水面下に移行する/移行させられる」ことである。「沈」に乾湿二方式があることは、海陸両文化に共通する。人や物は、「沈」が乾式であれば、濡れることはないが、「沈」が湿式であれば、濡れる上に、人間の場合、その状態が4～5分を超えると、死に至る。従って、この場合の「沈」は、乾式の「沈」でしかありえず、湿式の「沈」を想定してはならない。

ところで、湿式の「沈」は、海陸両文化で意味・用法に違いがない。そのため、人々は、類推により、乾式の「沈」の意味・用法も両文化で違いはない、と思い込んでしまう。たとえ、このような思い込みがあっても、「広」の側が「狭」の側のことを理解するのに問題が生じることはほとんどないが、逆の場合には、問題が間々生じる。

乾式の「沈」は、海の文化では使う対象に制限がなく使用面が広いのに対して、陸の文化では使う対象に制約があり使用面が狭い。両文化における「沈」の使用面の広狭の差に加え、そのような差異が存在すること自体に気付いていないために、「狭」（陸の文化）の側は、「広」（海の文化）の側の意味・用法が理解できないのである。そのために、「沈」を、決して想定してはならない湿式の「沈」に解釈した挙句、つじつまが合うように船名の表記に手を入れることまでしてしまったのである。

海の文化では、乾式の「沈」は、人であれ物であれ、何かが水平線の下に消えることである。これに対し、陸の文化では、人が触れることのできないもの（例えば、星・月や太陽）には、乾式の「沈」を考え（られ）るが、人が触れることのできるもの（例えば、船舶やその乗員）には、乾式の「沈」を考え（られ）ない。もうおわかりであろうが、「无目龜籠」とその乗員は、星・月や太陽と同じく、乾式の「沈」をしたのである。

水平線へと進みゆく船は、やがて、星・月や太陽と同じように水平線の下に消えていく。その様を日々観察し実地に検証した海の民が、船のこの種の「沈」を、星・月や太陽の「沈」と同類のものと考えたことは、本質を捉えた極めて合理的なものであったが、その発想は、日々の生活や物を見る視点の全く異なる陸の民には想像すらできないものであった。

落水は、危険である。今日のヨットでも、走行中に船から人が落ちると、救助は難しい。特に、夜間や荒天時に落水すると、救助はさらに難しくなる。それは、波間に入った落水者を一瞬にして見失うからであるが、ビギナー、ベテランを問わず、毎年、多くの人が落水で死亡している。

海上保安庁の発表によると、平成15年の海中転落事故の生存率は、21パーセントである<sup>435)</sup>。海に加え空からも捜索・救助活動が行なわれる今日でさえ、落水して助かるのは五人に一人である。古代において、外洋航海中の落水は、死を意味したであろう。

落水に備えて、今日のヨットには、テザー（ハーネスライン）という、艇と体をつなぎ止める命綱があるが、艇体側のフックは、力がかかればはずれることがあるので、ダブルアクションが望ましい。古代の海の民にとっても、「板子一枚、下は地獄」であり、落水に対する備えは欠かせなかった。亀の船載は、遠洋航海を示唆し、命綱の使用をも推測させるが、装着を本人任せにしない念の入れようは、火火出見尊の身分の高さを物語るものであろう。

「一云」に始まる文章は、わずか33文字であるが、提供する情報の質の高さは、秀逸である。

渡航用船舶として船眼装飾のないカタマランが準備されたこと、落水に備えた命綱は、火火出見尊には船上で動きやすいように他の乗員よりも細めのものが使用されたこと、尊の命綱は、本人ではなく他人がしっかりと装着したこと、装着確認後に出航しており、発航前点検がきちんとなされたこと、一行の船は、船影が水平線の下に消えるまで鄭重に見送られたこと、そして、この物語に登場するカタマランという船は、今風に言えば、竹でできたコ（kau）に相当すること、などが読み取れる。ポイントを押さえた正確な内容には、驚きを禁じえない。

#### 4-2-4. 船名の読み

音声情報は、通常、変換された文字情報に保存されているものであるが、このケースでは、誤記の発生とともに消滅した、と考えるべきである。

ご覧の通り、「おほまあらこ」は、決して何か由緒やいわれのある名を伝えているわけではない。単に、「无目龜籠」が「大目龜籠」と誤記された後に、名称もわからず意味も取れないまま、漢字表記に基づいて、とりあえず読みが一つ施されているに過ぎない。

日本語の読みは、「无目龜籠」に基づいて再構するしかないが、姉妹船名との整合性を考慮すれば、「无目」を「まなし」に、「籠」を「カタマ」に読むことに、問題はなかろう。また、「亀」は、姉妹船にはないが、「かめ」に読んでよかろう。小論では、「无目龜籠」の読みを「まなし・かめ・カタマ」としておく<sup>436)</sup>。

### おわりに

日本語の知識だけで、「请给我手纸」という中国語を正確に理解することはできないし、逆に、「油断一秒、怪我一生」という日本語は、中国語の知識で何の不自由もなく理解できるが、その理解は元の言語における意味とは全くズレたものである<sup>501)</sup>。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、解明に必要な海の民の言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、幾つかの船舶の名称について

解析を進め、「大目籠籠」の原表記が「无目籠籠」であることを指摘することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つ場合があるという認識は、やがて、常識となるのではないか。

〔注〕

- 101) 茂在寅男1984。  
 102) 茂在寅男1984. p. 32。  
 「枯野」等の解釈に外来語という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。  
 103) KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>.  
 Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.  
 これは、管見に入った唯一有用な知見である。引用の際の省略箇所は、・・・で示す。以下同じ。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP (<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>) では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p.137)の例があるので、kauをcanoeと理解してよい。  
 201) 寺川真知夫1980. p. 141-p. 142。  
 202) 小島憲之他校注1996. p. 390の原文表記。  
 寺川真知夫1980. p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。  
 203) 小島憲之他校注1996. p. 437の原文表記。  
 なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島氏は、窮余の策を講じるしかなかったが、歌の趣では、正確に解けるとは限らない。実際、この例でも、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいのに（後述）、逆に解釈をしまっている。  
 204) 小島憲之他校注1995b. p. 369の原文表記。  
 205) 小島憲之他校注1995a. p. 121の原文表記。  
 206) 小島憲之他校注1995a. p. 162の原文表記。  
 207) 小島憲之他校注1995b. p. 464の原文表記。  
 208) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注203) で、歌の趣では正確に解けるとは限らない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなくろう、と感じられることがあるのではないか。  
 同じ訓み誤りでも、「手」は、意味が取れないので、要検討という意識が残りやすく、訂正のチャンスがあるのに対して、「小/乎」は、誤解ではあるが、意味が取れたとってしまうため、再検討されるチャンスはほとんどない。  
 209) 総称の「kau-nui、狩野」は広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。狩野は、茂在氏の挙げる例であるが（茂在寅男1984. p. 20）、他にも、例えば、巨濃郡（このぐん、鳥取県）、金浦（このうら、秋田県由利郡金浦）がある。「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。なお、「tau-nui、手乃」の痕跡には、田浦（たのうら、長崎県福江市）があろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。  
 301) それぞれ、A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. p. 45とp. 69。  
 302) 茂在寅男1981. p. 201。茂在寅男1984. p. 71-p. 73。  
 303) 茂在寅男1981. p. 198-p. 200。  
 304) 茂在寅男1981. p. 204。茂在寅男1984. p. 76-p. 77。  
 305) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 252。  
 401) マナンは「目無し」、カツマは竹籠で、カタマ・カタミともいう。固く編んですきまのない竹籠の意。神代紀には「无目籠籠」とある。西村真次は「无間勝間の小船」をベトナムの籃船と比較して、竹製の目を椰子油と牛の糞をこねた塗料でふさいだ船であるとし、また松本信広は竹製の目を漆で充填した船と解している。（荻原浅男他校注1973. p. 138頭注3）  
 402) 「無間勝間」は、編んだ竹と竹との間が堅く締まって、隙間がない籠をいう。それを船として用いたのであり、船の形に作ったのではない。これを、潮路に乗せるのであり、漕いで行くわけではない。『書紀』



にはこれを海に沈めるとあり、『記』とは異なっている点、注意される。(山口佳紀他校注1997. p. 126 頭注4)

西宮一民1979. p. 98には、原文や現代語訳はないが、以下のような注釈がある。

「間なし」は隙間がない。「堅間」は「堅箕」で固く編んだ竹籠。隼人は竹細工を得意とした。竹は呪力ある植物で、この容器に籠っている間に異郷で新生するという龍宮女房譚と同型の説話である。

- 403) 隙間のない籠。「籠」はコトも訓むが、古訓のカタマによる。これは一書第一(一六三)の「無目堅間ななまを以ちて浮木うきぎに為なり」について、「所謂堅間は、是今の竹籠たけかごなり」とみえ、カタマは竹籠たけかごの意である。・・・記に「无間ななま勝間かたまの小船」とあり、カツマの語形もある。(小島憲之他校注1994. p. 156頭注8)

なお、小島氏の注に限ったことではないが、「竹籠たけかご」を「竹籠たけかご」と言い換えてはいけない。両者は、名称も形状も異なる全くの別物であり、「竹籠たけかご」とは、「竹籠たけかご」のことである。注414)参照。

- 404) カタマは竹製の籠。カタマは「堅編かたま」の意かという。カツマ・カタミとも。(小島憲之他校注1994. p. 163頭注15)
- 405) 『日本書紀』(神代下、第十段、一書第一)には、竹を取って大目亀籠を作った、とあり、さらに、「是今之竹籠也」と付記する(小島憲之他校注1994. p. 162-p. 163)。

406) 荻原浅男他校注1973. p. 138の現代語訳。

407) 山口佳紀他校注1997. p. 127の現代語訳。

408) 三浦佑之2002. p. 109の現代語訳。以下の脚注も見える。

原文には「无間勝間の小船」とあり、カツマ(カタマとも)は竹籠の意だが、ここは、目のない(マナシ=目無し)竹籠であり、海中に潜ることのできる潜水艦のような船をイメージしているのだろう。海底にあるワタツミの宮に行くための船である。昔話「浦島太郎」のように亀の背に乗って海底の龍宮城へ行ったら溺れてしまうはずだ。

- 409) 小島憲之他校注1994. p. 157とp. 163の現代語訳。p. 163には、「無目籠」を指して、「目のつまった籠」という注釈も見える(頭注12)。

410) 茂在寅男1984. p. 3-p. 4。

411) ④飾以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。(罗竹风主编1993. p. 1459)

412) 罗竹风主编1993. p. 1459。

413) 牧鱼人、<http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm>。

414) 『日本書紀』の注釈の意味は、もうおわかりであろう。「竹籠たけかご」とは、「竹籠たけかご」つまり「竹の籠たけかご (kau)」のことである。注403)参照。

415) 『古事記』は、「マなし」、『日本書紀』は、「まなし」である(後述)。

416) 「目」は、音義融合とも取れる。現代中国語の例：引得(yīndé)、インデックス。

417) 無目籠之小船に、竹がどの程度用いられたかは、わからない。台湾の竹筏(てっぱい)は、今日見ることができるとあり、竹製のカタマラン(原義)で、船眼がなく、外洋航海にも耐える。アティリオ・クカーリ、エンツォ・アンジェルッチ『船の歴史事典』p. 13(原書房、1985)参照。

418) カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入って来ていた、と考えている(茂在寅男1984. p. 44)。茂在氏が言うように、「堅」は、タミール語で、「結ぶ」を意味するが、古代日本人は、他の言語とも組み合わせ使用できるほどに、「堅」の意味・用法をマスターしていたと考えられる。船舶の名称ではないが、地名は、古代日本人の言語的な運用能力の高さを窺うことができる例がある。

例えば、琵琶湖畔の「堅田」は、この地区の田圃がとりわけ硬いからそれを地名としたわけではない。「堅田」の「堅」は、『日本書紀』の「無目堅間」の「堅」と同じ文字表記を用いているが、意味・用法も同じである。もうおわかりと思うが、「堅田」とは、連結したタ(tau、手/田)、の意であり、「堅間」同様、やはり、カタマランである。「堅田」はカタタ(カタマラン)がよく利用した場所であることから名付けられた地名である、と考えてよい。

今日、私たちがカタマランという船は、古代の日本語の中では、時代や地域により、カタマあるいはカタタと呼ばれていた、と考えてよからう。

419) 坂本太郎他校注1967. p. 169頭注10。

420) 小島憲之他校注1994. p. 163頭注12。

421) 他に、触覚情報として、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。

422) 『日本書紀』(神代下、第九段、一書第二)。

- 423) 『日本書紀』(神代下、第九段、正文)。  
424) 鵠は、ハトの総称と理解してもよく、後述する「亀鵠」の略称と理解してもよい。  
425) マルボーロ。「丸」は、音義融合とも言える。注416)参照。  
426) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.22.  
427) 茂在寅男1984.p.2-p.3は、「アウトリガー」とする。一般には「アウトリガー」が使われるが、ここでは、「アウトリガー・フロート」を用いた方が紛れがない。  
428) 『日本書紀』(神武天皇)。  
429) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.104.  
430) 初出は、茂在寅男1981.p.54-p.64。  
431) それぞれ、『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代上、第五段、一書第二)。  
432) Miguel Venegas, <http://www.goldengateaubon.org/birding/earlybirds/TheyCameBySea.htm>.  
433) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.174.  
434) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.550.  
435) 救命胴衣(ライフジャケット)未着用者のデータ。着用者の生存率は82パーセント。(第十管区海上保安本部、<http://www.kaiho.mlit.go.jp/10kanku/anzen/>)  
436) 音声情報は、再構しきれたとは限らない。というのも、単語の読みは、一般に、構成要素の読みの総和と同じであるが、そうならない場合もあるからである。「无目龜籠」が後者に属するようであれば、「まなし・かめ・カタマ」の読みは、修正されることとなる。  
501) 中国語の意味は、それぞれ、「どうか私にトイレトペーパーを下さい」、「油(の供給)が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます」である。

#### 【参考文献】

<日文>

- 荻原浅男他校注1973.『古事記 上代歌謡(日本古典文学全集1)』小学館。  
小島憲之他校注1994.『新編 日本古典文学全集 2 日本書紀①』、小学館。  
—————1995a.『新編 日本古典文学全集 7 万葉集②』、小学館。  
—————1995b.『新編 日本古典文学全集 8 万葉集③』、小学館。  
—————1996.『新編 日本古典文学全集 9 万葉集④』、小学館。  
坂本太郎他校注1967.『日本書紀 上(日本古典文学大系67)』岩波書店。  
寺川真知夫1980.『仁徳記』の枯野伝承の形成、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』、笠間書院。  
西宮一民1979.『古事記(新潮日本古典集成)』、新潮社。  
日本大辞典刊行会1976.『日本国語大辞典』、小学館。  
三浦佑之2002.『口語訳 古事記[完全版]』、文藝春秋。  
茂在寅男1981.『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。  
—————1984.『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。  
山口佳紀他校注1997.『新編 日本古典文学全集 1 古事記』、小学館。

<その他>

- A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*, Literary Productions Ltd.  
罗竹凤主编1993.『汉语大词典』(第十二卷)、汉语大词典出版社。  
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

#### 【付記】

本稿は、平成16年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(こう とうじ 中国学科)

2004年10月15日受理